

中古天台における生死観

——特に『牛頭決』を中心として——

荒 槓 純 隆

(叡 山 学 院)

中古天台は、恵心・檀那兩流の興隆にともない、多くの口伝文献が成立した。そこには本覚思想を基調として日本天台独自の解釈も見られるようになり、さらに進んで日本文化の諸方面にまでも展開している。それは中国の天台が日本の天台となった時代であると言える。天台の思想が日本人に受容され大きく展開した時代である。天台の思想は私たちの生活のあらゆるものに溶け込み、日本人の思想・文化に大きな影響を与えた。今回の学会のテーマである「仏教の生死観」は天台の思想においても根底にある重要な問題であると思う。それは生死は誰も無視することができない問題だからである。そこで、中古天台の生死観と題したが、分段・変易の二種の生死から一心の妙有へと替わっていくその過程を中国天台から日本天台へという大きな流れのなかで見てみたいと思う。

1 中国天台の生死観

先ず天台が所依の經典とする『法華経』の如来寿量品第十六に生死について次のようにある。

如来如_レ実知_二見三界之相_一。無_レ有_二生死若退若出_一。

中古天台における生死観（荒槓純隆）

亦無_レ在世及滅度者。非_レ実非_レ虚非_レ如非_レ異。

不_レ如_三三界見_二於三界_一。如_レ斯之事。

如来明見無_レ有_二錯謬_一。

（T九・四二c）

仏が如実に三界の相を知見するに、生死の若は退若は出あることなしとある。如実知見のまえには生死は無いのである。この「生死有ること無し」という仏の知見について天台は『法華文句』に、

「如実知見即是_レ実智。如_レクニ理ノ而モ照ニス三界之実_一。

実ニハ則無_二三界之因ノ相_一也。

無有生死_ト者。無_レ有_二二死之苦_一也。

起_レスヲ集_レス名_ケケ退_ト。無常ノ果現_{スルヲ}名_ケケ出_ト也。

亦無_シ在_二生_一死_一之世_二及入_中涅槃之滅_上。

此ノ二俱滅_{セリ}。故ニ云ニ亦無在世及滅度者_ト。

非_ス滅度之実_ニ。非_ス於生死之虚_ニ。故ニ云ニ非実非虚_ト也。

非_ス於世間之隔異_ニ。非_ス於出世之真如_ニ。

故ニ云ニ非如非異_ト。此ノ四ハ明ニス中道_ニ也。

（文句T三四・一三二a）

とある。天台も生死なしとする。ただ、その生死について二死の苦無し⁽¹⁾と言う。二死とは随他意によって二死の身を⁽²⁾示し二死ありと説くのであるが、ここに言う二死とは何を指して二死というのであろうか。天台の依るところは『大智度論』である。たとえば『法華経』化城喻品に五百由旬の險難を越えて宝所あるを説くに、その五百由旬について

『法華文句』には法相の基師をはじめ有家云、有人云と幾つかの説を挙げている。それを見ると、

五百由旬者。

(×) 基師三界結惑為三百。七地所斷習氣為四百。八地已上所斷無明為五百。今謂非正別義。又非三乘通義。
(×) 又有家云。流來生死變易生死。中間生死分段生死。但取三種開為五百不取流來。流來是有識之初反源之始。故不說之

(×) 有人難此云。勝鬘云。因五果二。果二者。謂分段變易。因五者謂五住。語果既別開流來與中間。語因亦應更広五住。無拋不可用。

(○) 大論明肉身菩薩即分段。法身菩薩謂變易。又云。阿羅漢捨三界報身受法性身。故知生死二耳。

(×) 有人云。三百喻三界。四百喻七地。二國中難過。五百喻八地已上。難者言。四百喻七地。則応三百喻六地六地與二乘齊功。二乘極久唯六十劫。或百劫。菩薩至六地時。二十二大僧祇。二乘於三道紆迴不応得齊。今謂此非別義亦非通義。

(×) 有人言。三界為三百。……利人不必爾。……

(文句T三四・一〇〇c・一〇一a)

※(○・×)は筆者が付したもの。

とある。天台は『大智度論』⁽³⁾に、肉身の菩薩の分段身と、法身の菩薩の變易身を明かすことから、生死はこの分段身と變易身の二つであるとする。また、法身の菩薩とあるが『法華玄義』には、

地前住前為生身。登地登住為生身得忍。謂生身中能破無明得無生忍也。言法身等者。謂登地登住破無明。捨生身居實報土名為法身。位居等覺。名為後心。若迹門唯益生身及生身得忍。本門進至法身及法

身後心^一。

（玄義T三三・八二二b）

とある。住前を生身、登住を生身得忍とする。法身は住上において無明を破し生身を捨てて実報土に居すを法身と名けるという。その位は等覚であり、後身である。後身とは等覚金剛心を指す。迹門においては生身と生身得忍を益すが、本門ではさらに法身と法身の後心に至るとある。いずれにしても仏果に至るには生身を捨てることが前提となる。この二死の苦について妙楽大師湛然は『文句記』に、

如実下正解ス。解スル中ニ初第一句ニ。若準下句ノ中ニ云フニ無コト二死^一。

応レ云レ無コト二種ノ三界之因ノ相也。直ニ云ルコト三界者。

能知見ノ者ノ名之為レ智ト。所知見如ナリ如ハ即中ノ境ナリ。

中ノ境ヘ不レカ出ニ三界ヲ故也。於ニ所見中ニ既通ニ凡聖ニ。

今以ニ如来ノ知見ノ皆実^一ナルヲ。余ノ所ニ知見ニ望レニ仏ニ皆虚ナリ。

而猶ヲ有レ因。仏ハ如レ実見ハス故ニ云ニ無因^一。

離ニ三界ヲ^一無レ別ノ理ニ故ナリ。無生死^一去ハ即無ニ二死果^一也。

起集下ハ結ニ上ノ無コトヲ二死ノ家之因果ニ耳。故有ニ五住ノ集名レ退。

有ニ二死ノ果名レ出。而ニ云ル無常ノ果現^一者。

二死ノ望^一ハ中ニ二ツ俱ニ無常ナリ。別シテハ指ニシテ二土ニ以テ為ニ二死^一ト。

通シテ論ハ金剛已前尚ツ名ニ無常ト故也。亦無在世及滅度者ト者。

亦是双非^一ニスルナリ二辺ノ因果。此之二句及両双非^一故云ニ此四^一。

故前ニ從ニ如実ニ知ニ滅度者。約ニ如ノ理ノ所離ニ。

次二句ハ者。共ニ顯ハ中体ヲ。後之ニ二句ハ約ニ能見ニ説。

(文句記T三四・三三五c~三三六a)

とある。湛然は二種の三界の因相なしというべきであるという。三界の世界をみるに、凡から見る世界と聖から見る世界に異なりがあるからであると、今、如来の知見をもって実となせば、如来以外の知見はすべて虚であり、因がある。その時点において生死の苦が生じているのである。二死は中(ちゅう)の悟からみれば二俱に無常であるとし、さらに二死は別して言えば二土を指して二死となすとある。湛然は二死を二土に当てはめている。二土とは天台が立てる同居、方便、実報、寂光の四種の仏土のなかの二土を指すのであるが、それは止観第一発大心に、

若シ以ニ四諦ニ堅ニ對ニ諸土ニ有レ増有レ減。同居ニ有レ四。方便ニ則三ツ。実報ニハ一ナリ。若シ横ニ敵對ニ者同居ニハ生滅。方便ニハ無生滅。実報ニハ無量。寂光ニハ無作ナリ云云

(止観T四六・五c)

と。さらに不思議境には、

十種ノ所居ヲ通ニ称ニ国土世間ト者ハ。地獄ハ依ニ赤鉄ニ住ス。畜生ハ依ニ地水空ニ住ス。修羅ハ依ニ海畔海底ニ住ス。人ハ依ニ地住。天依ニ宮殿ニ住ス。六度ノ菩薩ハ同人ニ依レ地ニ住ス。通教ノ菩薩ハ惑未レ尽サ同人天ニ依住ス。断惑ニ尽セル者ハ依ニ方便土ニ住。別円ノ菩薩ハ惑未レ尽者。同人天方便等ニ住。断惑ニ尽セル者ハ依ニ実報土ニ住。如来ハ依ニ常寂光土ニ住ス。

(止観T四六・五三a)

とある。十法に四土を説いている。通教の菩薩が界内の惑を断すれば方便土、また未だ断惑していない別円の菩薩は人天と同じく方便等に住すとあり、さらに別惑を断し尽くせば実報土に住す。如来は常寂光土に住すとある。これらのなか生死に関わるのは同居、方便、実報土である。分段身が同居土で變易身は方便と実報に亘るが、ここでは二土

とは同居と方便を指している。この二死について『維摩經略疏』には分段身を捨てて方便土に、また変易身を捨てて実報土に生ずるのかという問答を設けているので、それを見ると、

問。分段同居要見思尽。捨身方生有余。有余亦応別見思尽捨變易身方生報土耶。

答。不然。分段質礙煩惱雖尽必須捨報。若有余土隨破別惑因移果易即名実報。

（維摩經略疏T三八・五六六b）

分段身、つまりこの肉身は見思の煩惱を尽して必ず身を捨てて方便有余土に生ずべし、有余土もまた別の見思の惑を尽くして変易身を捨てて実報土に生ずるのかという問いに対し、然らず、分段身は必ず捨てる、しかして方便有余土に生ずるが、有余土においては別惑を破すに随って因移果易、つまり分分に無明の惑を破すに従って位位に中道の理を顯していくを実報と名づけるのだとする。天台は変易身になるには必ず分段身を捨てるとある。この答は未断惑の凡夫に対する答であり、権に従って答えたものであると思われるが、変易に生ずるには必ず分段身を捨てるとある。変易に生ずることについてももう少し詳しく見れば『法華玄義』に、

夫生變易則三種不同。

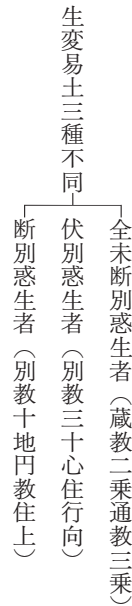
一全未断別惑生變易者。即是三藏二乘。及通教三乘是也。類如分段薄地凡夫不伏見思者云云。

二伏別惑生變易者。即是別教三十心人。習於中道伏而未断。類如分段小乘方便道也云云。

三者断別惑生變易者。如初地初住断惑是也。類如初果雖断見諦猶有七生。彼亦如是。若未断伏生者。用方便行真無漏為因無明為緣。若伏断者。順道法愛為因。無明為緣生變易土云云。

（大正T三三・六九四c～六九五a）

とある。これを図にすれば



一は別惑を断じていない三蔵の二乗と通教の三乗、未だに見思の惑を断じていない分段薄地凡夫の類。二に別惑を伏した別教三十心の人。中道を習い惑を伏すが未だ惑を断じていない類。分段小乘方便道の類。三には別惑を断じた者である。この三種のなか三番目に挙げる分段身から変易身に生じる過程をみると、別教の初地、円教の初住、つまり界外の惑を断じるによって変易土に生じるとある。この土は中道の理を一分証した菩薩の土であるが、そこにはまだ四十二品の無明が具されている。残された無明を断惑していくことによって報土を論じるのであるが、いずれも無明を具しており、生死を免れていない。湛然は『文句記』に、

証_二生死但_二言_二肉身_一者。四住未_レ尽通名_二肉身_一。言_二法身_一者。且通_二界外両土_一。俱称_二変易及法性身_一者是也。此証_二二死_一非_二常身_一。此大論正文。

（文句記T 34・二九九b）

とある。分段変易の二死を証するは常の身に非ずと。つまり無常の身であり、それは苦であるとするのである。それはまた大論の正文であるとする。

このように分段も変易も生死であり死がある以上苦であると天台は捉えている。『法華経』には仏の知見によれば生死はないとする。『文句』には仏の寿命を説いて「有量無常すべて仏の義に非ず⁽⁴⁾」とある。つまり分段も変易も有量であり、無常であるから仏の義に非ずである。それを苦であるとするのである。有量とは際限があることであり、無常とは常ではないことである。

る。このように考えて見ると、信仰の対象は絶待であり、永遠の命がなくてはならないと言うことである。これによって天台はダイレクトに生死は苦であると説くのである。

このように中国天台における生死観を『玄義』『文句』に見れば二死の生死（分段・變易）ともに無常であり苦であるとする。また、仏果に至るにはこの二死の過程を経ると捉えていたと言える。

2 日本天台の生死観

日本天台において生死観はどのように受け止められ展開したのか。これを二死の生死つまり分段・變易の生死から見てみたい。

まず最澄が『法華秀句』下、即身成仏化道勝のなかで

有^ル人ノ云^ク。變成男子^ト者。未^レタ免^ニ取捨^ヲ。今謂^ク。法性ノ取捨。法性ノ縁起^ハ。常差別^{ナルカ}故^{ナリ}。法性ノ同体。法性ノ平等^ハ。常平等^{ナルカ}故^{ナリ}。常平等ノ故^ニ。不^レ出^ニ法界^ヲ。常差別ノ故^ニ。不^レ礙^ハ取捨^ヲ。

（伝全三・二六四頁）

とある。これは『法華経』提婆達多品十二にある八歳の竜女が仏前で忽然と変じて男子となり、等正覚を成じたという、變成男子して速疾に成仏したと説く文から、分段身を捨てて成仏するは即身成仏ではないとする難について、最澄は、それは法性の取捨であるとする。法性の取捨と捉えて、分段身を捨てれば法性を捨てることになることから、分段身を捨てず、法性の随縁であると会通している。ここで最澄は法性の取捨としたことである。取捨とは、取はとる、あるいは捨に對すればそのままという意味にもとれる。捨は捨てることである。捨てるとは分段身を捨てること、分段生死を意味する。最澄は身をすてるのではなく、この身は法性の随縁であると了解したのである。この見解は

最澄以後おおきな影響を与えることになる。

この最澄の立場は安然にも引き継がれる。即ち『即身成仏義私記』に、

夫以。妙法蓮華者。一切如来微妙因果。摩訶止観者。一切菩薩速疾之径路。乗此乗者。白牛運載。直至道場。観此観者。神通飛騰。疾行宝処。是以八歳龍女。頓坐正覺之臺。三生之弟子。速入正聚之位。煩惱是菩提。無断身因。生死是涅槃。無傷陰入。皆不捨身不受身。悉於現身得成仏。是法難聞譬如曇華。是道難逢猶如盲亀。弟子幸値如実弘經之師。親聞即身成仏之道。如説信受。如説習学。欲知甘露之味。敬集醍醐之文。教観並弁。違順双通。……
(仏全二四・一七九b)

とある。安然も現身において成仏を得るとし、不捨身を主張するが、特に注意すべきことは、身を捨てずというその立場を主張するにあたり、最初に『法華経』をあげ、さらに菩薩の径路として止観をあげていることである。教と観を並べ弁ずることで二死の生死を了解した。この捨不捨について安然が取り上げるその理由は貞観五年六月の法華会において即身成仏の諍が起きたことにある。その顛末を記して正しい天台の理解を知らしめようとしたのである。即身成仏という問題は即心の成仏にして即身の成仏に非ずということに執する一類の執者の問いによって起こり、最澄以後円澄、徳円、光定などの『唐決』に見られるように日本天台が抱える一つの問題となる。ここに挙げる『即身成仏義私記』にも「光定問宗頼決」の『唐決』を引いて、「不捨分段之身。不受變易之身。自証法性之身。能現生身之相」⁽⁷⁾と主張する。また安然の師である慈覚大師円仁の判を挙げて「我幼くして先師に奉(つか)えて、長く遠国に問うに」得た答は「円教の肉身は転じて不捨」⁽⁸⁾であった。生身を捨てるとは転捨であり、円教の肉身は転じて捨てずとする。ここである円教の肉身とは生身得忍の菩薩が実報土に生ずるに捨か不捨かという問題をいうのである。また、

安然是最澄の即身成仏化道勝にいう「今謂常平等故不出法界。常差別故不礙取捨」を挙げて、

論_二実道_一分段變易。生身法身。都無_二取捨_一。

（仏全二四・一八六b）

実道を論じれば本より取も捨もないと論じている。これは最澄が法性の随縁であるとした捉え方をより進めたもので、安然是これを『摩訶止観』にその径路を見出している。それは問答のなかに「止観云」「今円頓止観之意也」「今止観旨也」と随所に止観を引いていることから明らかであるが、その一つを挙げれば、

問。從_二分段_一入_二變易_一者。為_レ捨_レ報耶。為_レ不_レ捨耶。

答。円教行人。円聞円信円行円証円嚴円立。以_二不思議観_一。観_二不思議境_一。転_二不思議報_一。得_二不思議証_一故矣。

（仏全二四・二〇〇a）

分段より變易に入るに分段身を捨てるのかという問にたいして、安然是止観⁽⁹⁾を行ずることによって不思議証を得ると答を導きだしている。さらに問答を挙げれば、

問。諸文皆云_二分段質礙報必応_レ捨_一。又云_二煩惱報故報必応_レ捨_一。何故今者言_二不捨_一耶。

答。決云。単約_二小乘_一。不_レ云_二報転_一。故依_二大品法華二文並是円観報陰転義_一也（弘決文）。

当知。捨報之言是小乘之義也。胎経皆不_レ捨_レ身不_レ受_レ身。悉於_二現身_一得_二成仏_一。即今円頓止観之意也。

（仏全二四・二〇〇b）

と、現身に成仏を得るは即ち今の円頓止観の意である。このように止観に拠るのであるが、特に止観を出してくるのは『法華玄義釈籤』に、

彼止観為_レ成_レ観故乃以_二相待_一為_二不思議_一。唯一絶待為_二不思議妙_一……（中略）……止観相待義似_二於別_一。故判為_レ

鹿。今此妙名兼_二本迹_一。彼文妙觀独在_二於円_一

(玄義T三三・八一六中)

とあるように、止觀においては觀を成ぜんがため相對を可思議の鹿となし、唯一絶待を不思議の妙となす。本迹を兼ねる妙觀は絶待の円にあるという。相對を認めない円の立場である。その妙なる觀は独り円にありというように、そこには捨も不捨も忘れてしまうのである。このように止觀を捉える時、觀心、止觀の持つ特異性がより一層強調される。安然以後、生死觀も心によって捉えられていくことになる。

3 『牛頭決』における生死觀

安然以後、中古天台に入って『天台法華宗牛頭法門要纂』が成立する。『天台法華宗牛頭法門要纂』は『牛頭決』(以下『牛頭決』とする)と称され最澄撰と伝えられるが、最澄撰ではなく、平安末から鎌倉時代に成立されたものとされる。その『牛頭決』の構成を見ると、

五双要法門

第一 鏡像円融 第二 十界互具 第三 仏界不增 第四 俗諦常住 第五 三惑頓斷 第六 分段不捨 第七 煩惱菩提 第八 無明即明 第九 生死涅槃 第十 即身成仏 (伝教大師全集五・五〇頁)
五双十箇の法門より成り立っている。いずれも生死と結びつく内容であるが、その中からいくつか取り上げてみると、第五の三惑頓斷では

伏以。生死二法者一心之妙用。有無之二道者本覺之真徳。所以心者無来無去之法。神者周遍法界之理也。故生時無_レ来。死時無_レ去。無来無去心施_二有之用_一。心即現_二六根之体_一。以_レ之名_レ生。周遍法界神施_二空之徳_一。神即亡_二五陰

之身。指之曰死。別無來之妙來。無生之真生。無去之円去。無死之死也。生死體一。有空不二。如是知見。如是觀解。心仏顯體。生死自在。哀哉。六道衆生。悲哉。三界凡夫。雖生徒生。生故不知。雖死空死。死由不覺。本有無作之生死。無始無終常住。有無之心體。非斷見。非常見。若云離生。三世諸仏。出於世間。不可利益衆生。若云止死。十方如來。入於涅槃。不可受寂滅之樂。勿欲住生死。難忍輪廻之苦故。勿存離生死。難免斷見之咎。纔悟一心之體。早離二見苦。或除自佗共無因之四計。或愈作止住滅之四病。是生死自在之法藥。臨終正念之秘術也。行者常能思念勿怖生死矣。

（伝教大師全集五・五九―六〇）

とある。この文は第九の生死涅槃とほぼ同文であり、裏書には、

第九第十二文者。慈覚大師。名本無生死論。号一念成仏義。

（伝教大師全集五・六六頁）

とある。慈覚大師円仁の『本無生死論』とされ、『一念成仏義』と号されるとある。『天台本覚論』に既にふれられているが、これと同文におなじく伝教作と伝える『五部血脈』には「生死覚用鈔、又名本無生死論⁽¹¹⁾」とある。さらに『百題自在房』には湛然の製作とも伝えられているのである。その冒頭に「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覚の真徳」とある。生死は一心の妙なる働きであるとする。

第六の分段不捨では、「捨入の言は凡聖を分つ。凡に在りては捨を以て入となし。聖なるが故に法性を捨てざる也⁽¹²⁾」とある。捨とは分段生死の捨、入とは変易生死に入ること、ここでは『法華秀句』と同じく分段身を法性の随縁と捉えている。第七煩惱菩提では「実知の故に色心体一、亦是寂なり、心は光なりと、処居に従えばこれを寂光、能居に従えばこれを法身と名づく。身上に別なく機法に二なし。同じくこれ中道なるが故なり⁽¹³⁾」とあり色心を寂光、法身にあてている。第十の即身成仏では「機に對せば修証無量劫、妙法深秘の藏は心の法身仏を顯はし、一念須臾の間、

謂、衆生の心を指して直に妙法の理を説く、心性本覺を以って無作実仏となす⁽¹⁴⁾とある。

このように『牛頭決』の捉え方は円教の立場であり円教の断惑である。言葉を替えれば捨と不捨とは知と不知の異りである。また生死の本源を一心にしているが、『法華秀句』の法性の随縁とする法性から心へと生死の捉え方が進んでいる。『天台本覚論』には「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覺の真徳なり」「無來の妙來、無生の真生、無去の円去、無死の大死なり」、「生の時も来るなく、死の時も去るなし。生はこれ真生、死は即ち円死なり。生死は体一、空有は不二なり」といって、生死の二元相對の突破・超越、ひいては生死にたいする絶対肯定が説かれている。否定し、捨てるなら死のみならず、生もまた捨てるのであり、肯定し、取るなら生のみならず、死もまた肯定するということである。積極的にいえば、生も死も、ともに絶対の真理、永遠の生命の活現のすがたということである。一心の妙用とは、生死を主体的精神でもって掌握することを意味する。生死觀は、ここに、その窮みに達したといえようと論じている。心に永遠の生命をみる心が心の掌握を意味する。即ち無來無去の常住なる心を本源とし、その妙なる心の働きの生死であるとする。永遠の命のなかの生死として捉えたのである。最澄が『秀句』の中で「法性の取捨」あるいは「法界を出でず故に取捨を妨げず」といい、安然是「実道を論ずれば分段變易生身法身すべて取捨なし」と結論する。詰まる所取捨の選択は自己にあり、法の立場に立てば、取捨を云々することはなく、云々することは結局中道の意を顯すためであるということになる。『牛頭決』ではそれをさらに發展させて妙なる心に焦点を置いたことである。生死を突き詰め終に心に帰一し、そこに限りない常住である永遠の生命を見たのである。これが中古天台の窮みに達したということであろうと思う。『牛頭決』にはさらに心性本覺などの用語も見られるがこれらの了解がまさしく中古天台における本覺思想と見られる。

また、心に帰一することは、安然の『即身成仏義私記』で「摩訶止観とは一切菩薩速疾の径路なり」と述べるように己心中に行ずる止観と密接に結びつき、止観がより昂揚されていくことになる。

4 ま と め

中国天台から日本天台へと生死観の流れの概略を見てきたが、中国天台は生死は二死の苦であると捉えるのに対して、中古天台においては生死は心であると捉えたことで、中国天台とは異なる生死観の展開が見られるのである。これは口伝関係の文献に顕著に多く見られるのであるが、『牛頭決』において生死は一心の妙用であるとするその心は止観の了解と伴って、より心を深めていく。それは心を本覚の体となし、万法の総体である、あるいは自心寂光と展開していくのである。

以上、狭い見識で中国・日本天台における生死観の流れを見たが、日本においては特に密教とも関わることから、単に顕教だけでは解決できない複雑なものがあるのであるが、密教との関わりについては、全く触れることができなかった。少しく反省して今後の課題としたい。

註

- (1) この「二死」の苦であるが、弘安版では「生死」の苦とある。
- (2) 『法華文句』大正三四・二二三上。
- (3) 『法華文句記講録』には大論第十二の「菩薩末後肉身得無生法忍。捨肉身得法身云云」(T二五・一四六b)とある。
- (4) 大正三四・一二八c

(5) 即身成仏義については『天台教学と本覚思想』大久保良峻著、また「天台教学における竜女成仏」（『日本仏教総合研究』第四号）などに詳細な研究がある。

(6) 註出続二五。四二三丁左下

(7) 仏全二四・一八九頁

(8) 仏全二四・二一五b。また『宗要光聚坊』下には「尋云。慈覚大師御釋如何。答。具文云。幼奉先師。長問遠国。自分段至變易。有転入者。有隔入者（云云）隔入者。自分段生方便土也。転入者。自分段生実報土也。生身得忍菩薩。不捨分段身云事分明也。サテ転捨云事。転劣成勝捨云也。覚大師・千観・都卒先徳。皆此義也。サテ天台御釈。転捨云事有歟云。止観。転陰云成三徳釈。可思之。但。此釈別教下タナレトモ弥円教誠証也。一義云。山家既常差別故不妨取捨積タマヘリ。覚大師。何違先師御釈耶。仍彼御釈意。理日無取捨。事日有取捨也。一類執者一向捨云故。為破彼寄理爾釈計也。実捨可得意歟（已上証擲畢）」とある。（『続天台宗全書』論草五、三二二b―三二三a）

(9) 『摩訶止観』には「此菩薩聞圓法。起圓信。立圓行。住圓位。以圓功德而自莊嚴。以圓力用建立衆生。云何聞圓法。聞生死即法身。煩惱即般若。結業即解脫」（T四六・二a）とある。

(10) 牛頭決については、『天台本覚論』、大久保良順「『天台法華宗牛頭法門要纂』の牛頭法門について」（天台学報35号）、「天台口伝法門と禪宗」（大正大学研究紀要第52輯）、拙稿「『天台法華宗牛頭法門要纂』の牛頭の名称について」（天台学報39号）参照。

(11) 『伝教大師全集』五・三六〇頁

(12) 『伝教大師全集』同・六〇頁

(13) 『伝教大師全集』同・六二頁

(14) 『伝教大師全集』同・六五頁

(15) 『天台本覚論』（岩波書店）——続日本仏教の思想2——、五二五頁

